

第3章 子どもと保護者の携帯電話・パソコンに関するアンケートの実施

第2節 調査の内容

3.2.1 調査内容

携帯電話、インターネットについて、その所持状況、利用状況、そして、それらに対する意識を調査する。回答は、紙または、インターネットにより報告してもらう。

3.2.2 調査対象校

小学校

函館市内、七飯町、上磯町、大野町の8校 477名

中学校

函館市内、七飯町、上磯町の5校 444名

3.2.3 調査日程

11月20日 調査用紙完成、WEB完成

12月2日 電話による打診

12月2日 調査者が用紙を持参し、検討依頼

12月6日～10日 指導教官と学校を回って依頼

12月13日～17日 各学校で調査

12月17日 調査終了

12月20日～21日 調査用紙回収

12月21日～12月末 回答入力及び分析

3.2.4 調査の実際

3.2.4.1 質問紙を作る。

「何かをはじめなければならない。」これが調査にかかった最初の思いである。現職として大学院に派遣され、情報教育について、あちらこちらの文献を読み、また、自分のコンピュータ技能の向上を図る自己訓練を行った。その一方、現職の先生から見る大学の毎日に対して、「何かをやろう。」という思いで、ビデオを作ったり、理科サークルに参加したり、七夕をしたり、イルミネーションをしたり、いろんなことをやった。でも、秋になり、だんだん涼しくなるにあたり、そろそろ形あるものを作っていかなばというのが正直な思いであった。

その頃中心に資料を集めていたのが、インターネットの陰の部分であった。筆者自身、学校にコンピュータが入るのがめずらしかった頃からコンピュータを使った授業をしていた。「コンピュータはすばらしい。先生方どんどん使いましょう。」という研究発表をしていた。時が流れて、コンピュータを使うのが当たり前前の時代になり始めた時、社会の方、

いや子どもたちの方が先に行ってしまう、気がつくとコンピュータや携帯電話の正しい使い方やモラルなどは、後回しの状態になってしまっていた。

そんなことから、今までいいことばかりを語ってきたが、ここで警鐘を鳴らすのも自分の役目と思ってこのような研究に入っていったわけである。

さて、その頃、長崎では同級生を殺してしまうという悲しい事件が起こってしまい、インターネットの影の部分に対する指導も見直されるようになってきた。1節に掲げた日本PTA連合の調査を見て、自分たちの周りについて、その実態と意識を調査しようと思った。中でも興味があったのは、パソコンや携帯電話の親と子どもの意識のずれであった。

筆者は、日本PTA連合会をはじめ、ネット上で、このような調査をしているものを徹底的に調べ、項目を整理してみた。質問紙に関する授業では、結果がうまく引き出せるような設問を構成していくことが大切であると学んだ。筆者なりに選択肢を工夫して、親用、中学生用を作って、近くにいる大学院生に、何を聞いているかわかりづらいところ、選択肢が足りないところなどを指摘してもらい、わかりやすいものにしていった。また、回答するのにどれだけ時間がかかったかも測ってもらった。学校にも様々なアンケートが来るが、どうしても出さなければならないものは、仕事としてやるが、そうでないものは、あまりややこしいものは、ゴミ箱行きになってしまうこともある。忙しい時間を割いてやっているのであるから、あまりごちゃごちゃ細かく聞かれても、答える気持ちになれないのである。そういう自らの体験もあって、10分以内で答えられ、しかも、できるだけ選ぶだけで、わかるようにということを頭に置いた。

3.2.4.2 WEBアンケートづくりに精を出す

筆者は、大学の時代からパソコンと親しんできたことは今までも何度も述べてきた。大学院に来て、CGIのことも勉強したこともあって、WEBと紙のいずれからでもできるアンケートをと考えていた。筆者は、出来上がったアンケートをWEB化することにエネルギーを使った。WEBアンケートにはいくつかの利点がある。全国的な調査の場合、インターネット接続環境さえあれば、日本中、また世界中どこからでもアンケートに答えることができる。時間や場所を気にせず、いつでも、どこでもアンケートに答えることができる。集計が楽である。アンケートをやる方にとっては、何ととってもこれが一番の魅力である。メールソフトを使って自動集計することができるのである。紙だと、コンピュータに入れるまでに膨大な時間と手間を要することになる。しかしながら、短所もある。その回答が本当にお願いした方のものなのか、きちんと考えて答えたもののかなど、考慮しなければならない点もある。今回の調査も、このWEBと紙のいずれでも回答できるようにしようとしたのである。その陰にはちょっとしたたくらみもあった。それは、おそらく、子どもの方がパソコンに詳しいであろうから、子どもが、アンケートに答え、親は、子どもに聞きながら、アンケート回答に挑戦する図式を思い描いていたのである。ところが、結論から言うと、WEBからの回答は、数えるほどしかなかったのであった。エラーチェックや、メールからの処理系統に莫大な時間をかけていただけあって、このこ

とはだいぶショックであり、調査に対する意欲があまり高くなかったのかなあ、インターネットの利用がまだ根付いていなかったのかなあなどと思った。でもこれに使ったエネルギーは自分のコンピュータ技能が確かに向上したことにはつながったのである。

3.2.4.3 お願いに回る。

さて、アンケート用紙のサンプルができた。一応、子ども用はピンク、保護者は水色と色分けをした。どの学校にお願いをするか。さて、悩むところである。果たして頼んだら受けてくれるだろうか。最初は、自分の学校。これは、無事クリアである。職員録とにらめっこしながら、知っている校長先生を探し、電話。教頭先生に簡単な趣旨説明をして、話を聞いてもらうアポイントを取るという作業であった。この作業は不安でどきどきであった。でも「案ずるより生むが安し」で、ほとんどの学校が快く、話を聞いてくれることになった。雪も降り出した気候であるが、約1週間をかけて、道南の学校を回ったのである。

それぞれの学校では、ほとんど校長室に通され、緊張しながらも、アンケートの趣旨の説明に理解を示してくれ、快く調査に協力してくれた。筆者は渡島情報教育研究会の講習会や研究会で、名前が出るが多かったせいか、「情報教育の佐々木先生」というところも少しあったのかなあと思い、ちょっぴり嬉しい気分になった。

3.2.4.4 案の練り直し

そんな順調な滑り出しではあったが、ある学校へ行ったら、調査の質問紙について、たくさんの指導が入った。いろいろな文献を見て作ったとはいえ、それはやはり素人のものであった。後日、もう一度校長先生にも指導をもらい、表現や内容、質問の順序、文字の大きさなど全て作り直すことになった。

本調査まで、期間が迫っている中、筆者は研究室にこもり、もういちど質問紙を見直した。持参する期日までに、何とか間に合った。自分の研究の甘さを身をもって知らされたいい教訓であった。

実はその時、既に質問紙は刷り上がった状態であり、たくさんの紙を無駄にしてしまったが、調査の厳しさを知る勉強になった。

3.2.4.5 本調査開始

刷新された質問紙を持って、学級担任の先生がやりやすいように袋に詰めて、回収の袋もつけ、説明書もつけて、学校を回った。二度目の訪問で、ほとんどの学校は教頭先生に説明して、用紙を置いてきた。

3.2.4.6 回収

3回目の学校訪問である。上磯街道は雪も多くなってきた。電話連絡して、期日、時間を決めていったので、問題なく回収できた。

3.2.4.7 データ入力

調査期間、どれだけメールで回答が飛んでくるか楽しみに待っていたが、そんな期待を大きくうらぎり、メールでの回答はほんの数通だけであった。不安ではあったが、ピンク

とブルーの回答用紙を山にして、嬉しいやら、「たいへんだなー」と思うやらである。

筆者は、クリスマスも研究室からイルミネーションを見ながら、データを入力していった。個人のデータの秘密を守るためということで、家庭ごとに封筒に入れてもらった。学校ごとに保護者と児童・生徒（ブルーとピンク）に通し番号をつけて、あとからたとえ、ごちゃごちゃになっても、対応できるようにした。

この研究室では、修了を控えた2年目の先輩さんも、修論に取り組み、エクセル、ワードの技法が飛び交いながら、熱い平成16年を終えた。

3.2.4.8 調査結果の報告

年が明けて、筆者は、調査の概要をまとめた。それは、本論文を書くためというのが大きな目的であったが、もう一つの願いがあった。それは、調査結果を学校、保護者に知らせ、携帯電話やインターネットの使い方について、話し合う機会を持ってもらえればと思ったわけである。それと、忙しい中、学校も、家庭も調査に協力いただいたわけである。結果を報告するのが礼儀であろうと思った。

筆者は、2つの報告をした。一つは学校ごとの集計データである。全体のデータと比べてその学校の特徴がわかればと思ったのである。もちろん、調査していただいた保護者や児童・生徒の回答の秘密を守るために、数値のみとした。もう一つは、各家庭に配布したものである。これはお礼の文書と、A3の紙4ページにグラフを取り入れながら、結果をまとめたものである。それぞれの学校から、調査対象の皆さん（未提出者も含めて）に渡した。